

Bookstart Newsletter



2017
夏
No.57

ブックスタート・ニュースレター

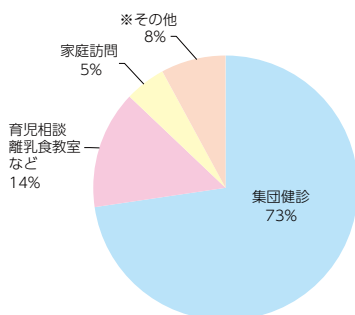


福井県福井市

特集

「すべて」の赤ちゃんと保護者に出会うために ～0歳児集団健診以外でブックスタートを行う自治体の取り組み～

●ブックスタートの実施機会



※その他…図書館や子育て支援施設での実施など
2016年度実施状況確認シートをもとに集計 N=984

ブックスタートは、事業を行う市区町村に生まれたすべての赤ちゃんとその保護者が対象です。そのため、多くの自治体では、受診率が非常に高い赤ちゃんの集団健診で実施しています。しかし中には、健診が病院での個別受診のため集団健診がないなどの理由で、0歳児対象の母子保健事業（例…育児相談、離乳食教室）や、図書館、子育て支援施設などで機会を設け、ブックスタートを行っている自治体もあります（左グラフ参照）。その場合、集団健診に比べると参加率が低くなることが多いため、広報や、絵本を受け取っていない親子へのアプローチを工夫しています。

では、そもそもなぜ、すべての対象者に出会うための努力をすることが大切なのでしょうか。福井県福井市の事例から、改めて考えます。

ケーススタディ
福井県福井市

集団予防接種で
ブックスタートを開始

福井市では、0歳児の集団健診が行われていないことから、2003年の事業開始から2011年度まで、生ポリオワクチンの集団接種を主な機会としてブックスタートを実施していましたが「※」。しかし、不活化ワクチンの導入に伴いポリオの集団接種がなくなったため、2012年度からは図書館と1歳6か月児健診で実施する方法に変更。この開始当初の集団予防接種での経験が、現在の「すべて」を目指す福井市の活動につながっています。
※集団予防接種のない月は市内3か所の図書館で実施

様々な親子との出会い

ポリオの集団予防接種は、毎年春と秋に期間を限定し一斉に行われていた。そこでは、健診以上に、赤ちゃんの健康のためにと、苦勞して都合をつけ、予防接種を受けに来る人が多くいました。

現在、図書館でのブックスタートに参加する人は対象者の約45%ですが、1歳6か月児健診と合わせると97%になります。
一方で、集団予防接種には来ていた障がいのある方にはほとんど会うことがなくなりました。そうした残りの3%に含まれる可能性がある方へどのようにアプローチをしていくかは、今後の課題だそうです。

連携の輪で活動をより充実させる

福井市では、事業開始当初から、図書館、保健センター、子育て支援室、市民課、ボランティアが連携しています。保健センターは、1歳6か月児健診での実施体制づくりのほか、ブックスタートで支援が必要な人がいた場合などに、図書館からの連絡を受け対応します。また、医療機関での0歳児健診受診票送付の際に、ブックスタートのチラシを同封しています。市民課では、出生届の提出時に保護者に案内を配付。ボランティアの募集では、子育て支援室から保育士OBに協力を募るなど、活動の充実のために各課が役割を担っています。

Voice



みどり図書館
のうなか ひとみ
農中 仁美さん

すべての赤ちゃんに幸せに育ってほしいという願いを込めて

図書館員としては、ブックスタートで絵本を手渡して、子どもが本を好きになってくれたら嬉しく思います。でもまずは、安心して子育てできる環境があって、保護者も赤ちゃんも安定した状況になれば、親子で楽しい絵本の時間を持とうという気持ちにまでならないのではないかと思います。だから私たちは、まず、「みんな子育てを応援しているので安心してね」というメッセージを伝え、その上で、赤ちゃんに絵本をひらく時間の楽しさを伝えています。

子育ては一人でするものではなく、地域みんなで支えていくもの。その思いを直接伝えることも、ブックスタートの大きな目的の一つです。

これからも、目の前にいる親子一組一組と向き合いながら、福井市に生まれたすべての赤ちゃんの健やかな育ちを支えていきたいと思えます。

※ 所属は取材当時

対象者全員にアプローチする大切さ

図書館に来る人は、本や教育に関心のある人がほとんどです。でもポリオ予防接種の会場には、そうしたことにはあまり関心がない人も来ていて、「赤ちゃんでも、絵本を読んであげると喜んでですよ」と話すととても驚かれたり、「図書館に行ったことがないです」といった声をお聞きしたり。図書館に来ていない人は実はたくさんいるのだと感じ、だからこそ、すべての親子を対象とするブックスタートは、とても意味のあることだと思いました。

図書館で事業を実施すれば、関心のある人は参加します。でもそれだけでは、行政サービスの公平性を考えても十分ではありません。手間をかけてでも、図書館でのブックスタートに来ていない人たちに確実に出会える1歳6か月児健診でも実施することが必要だと考えています。

おわりに

どのような実施方法においても、ブックスタートの対象となる親子全員と会うことは、難しい場合もあるかもしれませんが、参加しない方の中にも、支援が必要な人がいる可能性があります。

また、ブックスタートは、地域の人たちの「赤ちゃんにすくすく幸せに育ってほしい」という思いが形になった活動です。そして、その思いを「すべて」の親子に直接伝えることができる、貴重な機会だと捉えることもできます。

だからこそ、「すべて」の親子に出会うために何ができるのかを考え、参加しない人へのアプローチに取り組むことが、とても大切なのではないのでしょうか。

接種対象が3か月児からだったため、産後間もなく体調が万全でないなど、心身ともに辛い状況でやってきた保護者が、ブックスタートで育児の悩みを吐露することもありました。また、日本語を母語としない方や、障がいのある赤ちゃんや保護者に対応することもありました。

それらの経験を通じて、改めて様々な状況の親子が福井市にいたことがわかり、そうした支援を必要としている人こそ、地域で子育てを応援していることを伝える必要性を感じたのでした。

実施機会の変更

図書館で45%、1歳6か月児健診でも実施することで97%に

2012年度からポリオの集団接種がなくなることが決まった際には、どのような方法であれば、すべての親子にブックスタートを実施できるかが課題になりました。

そこで、市内3か所の図書館でそれぞれ月1回ブックスタートの日を設定し、さらに、月4回行われる1歳6か月児健診にも図書館職員とボランティア

福井市のブックスタート

● 図書館会場にて



様々な月齢の赤ちゃんがやってきます。



赤ちゃん一人ひとりのペースに合わせて絵本を楽しみます。

● 1歳6か月児健診会場にて



健診を終えた人全員に「ブックスタートは受けましたか？」と声をかけ、受けていない人を会場に案内します。



絵を指さしたり、声を出したり……。1歳6か月児健診のブックスタートは、元気いっぱいにぎやかです。

アが出向いて実施することになりました。こうしたやり方は手間も人手もかかりませんが、対象者全員に出会うためには、図書館だけでなく、福井市に生

まれたすべての赤ちゃんが最初に集まる機会である1歳6か月児健診でも実施することが最善であると考えたので

赤ちゃんの時から始まる、言葉の世界を豊かにしたい

元絵本編集者 **田中 秀治**



私は赤ちゃん向けの月刊絵本の創刊（1995年）に携わっていました。このシリーズの出版にあたり考えたのは、お母さんやお父さんが赤ちゃんに絵本の文章を読みながら、自分たちの中にあるたくさんの言葉を赤ちゃんにかけ、赤ちゃんの言葉の世界を豊かにしていきたいということでした。最近では家庭で「あやし言葉」や「子守唄」などが消えつつあり、子どもたちは言葉の楽しさや面白さに接する機会が減り、赤ちゃんの時から始まる言葉の体験の幅は狭くなってきているように感じます。そんな赤ちゃんたちが絵本を媒介にして言葉の楽しさを味わい、言葉を好きになってほしいと思いました。子どもたちの言葉の体験は、誕生した時から始まっています。ですから、絵本の楽しさを伝えると同時に、赤ちゃんが言葉の楽しさや面白さをたっぷり味わえる作品を出版したいと考えました。

そこで言葉も体験も少ない赤ちゃんはどのような絵本に関心を示してくれるかを知るために、親しい保育園を訪ね子どもたちと過ごしたり保育士の方たちと2年近く勉強会を持ち、赤ちゃんに絵本の楽しさを伝えるにはどのような作品を出版したらいいかを考えました。

この保育園での経験を通して分かったことは、赤ちゃんが最初に関心を示すのはリズムカルで、誘いかけられるような呼びかけの言葉の絵本でした。赤ちゃんは生まれたときから毎日の生活の中で、お母さんやお父さんから食事の時、おむつを換える時等々、様々な形で呼びかけるようにして話しかけられているので、そのことと関係があるように思います。またリズム感のある同じ言葉の繰り返しも大好きです。そんなことを知る中で、赤ちゃんが最初に喜んで遊ぶ遊び「いないいない ばあ」は、そうしたことを兼ね備えた遊びだと思

いました。赤ちゃんはこの遊びを何度繰り返しても飽きることがありません。赤ちゃんは「いないいない」に続き「ばあ」と言うと、言葉と一緒に隠れているものが目の前に飛び出してくることにわくわく、どきどきしながら喜びを感じているようです。これはまさにびっくり箱を開ける楽しさと同じではないでしょうか。

こうしたことから最初に赤ちゃんが興味を感じる絵本は、呼びかけの言葉の繰り返しと「いないいない ばあ」だと思いました。具体的な作品を一冊紹介すると、『でてこい でてこい』（林明子・作 福音館書店）では、緑や青やピンクの色紙に向かって「だれか かくれているよ でてこい でてこい」と呼びかけてページを繰ると、「げこ げこ げこ」とカエルや「ぴよーん ぴよーん」とウサギが飛び出します。ページを繰るたびに赤ちゃんはびっくり箱を開ける楽しさと喜びを味わい、そこにお母さんやお父さんの言葉が加わることで絵本をより身近に感じてくれると考えています。また、「いないいない」と「ばあ」の二場面の表現は、本の持つ連続性やページを繰る楽しさも伝えることができと思っています。赤ちゃんはこうした単純な絵本を繰り返し楽しむことで、やがて物語の絵本へとつながっていくと思います。



田中 秀治（たなか ひではる）

元絵本編集長。児童書出版社にて、未就学児向けの月刊科学絵本や物語絵本、小学校低学年向けの月刊誌などの編集に携わる。特に、赤ちゃんや幼児向けの月刊絵本は創刊号から携わり、主に低年齢の子どもたちの絵本を編集してきた。現在は、子どもたちにとって本を読んでもらう喜びや大切さについて講演を行っている。

イベント開催案内

「子ども・社会を考える」講演会シリーズ⑤
『のびやかな育ちを支える～0.1.2歳児保育の現場から～』

井桁 容子（東京家政大学ナースリールーム主任保育士）

開催日：2017年9月9日（土）13:30～15:20

場所：東京・日暮里サニーホール
参加無料・事前申込制・定員 400 名

お申し込み方法等、詳細はウェブサイトをご覧ください。
<http://www.bookstart.or.jp>